法政大学教職課程センター主催　シンポジウム

学習指導要領の改訂と教職課程

―　実施段階に入った新指導要領のもとで　授業をどうつくっていくのか
教職課程にたずさわる皆様と語り合う会　―

日　　時：2022 年 10 月 21 日（金）　17：00 ～ 18：30（開場 16：50）
会　　場：法政大学市ケ谷キャンパス　富士見ゲート 6 階　G602 教室
＃ハイフレックス形式で実施（ZOOM 同時配信）

＜プログラム＞

開会の挨拶：児美川　孝一郎（法政大学教職課程センター長
法政大学キャリアデザイン学部教授）

［第１部：全体会］
＜講演＞我が事ととらえるまなざしを育てる
～政治に関心を寄せるきっかけとして
本山　明（法政大学キャリアデザイン学部・社会学部兼任講師）

＜講演＞講義を通じて学生はどのように社会・世界と関わるか？
～「教育相談」における課題設定と共有～
田澤　実（法政大学キャリアデザイン学部教授）

［第２部：意見交換会］
来場者・視聴者との質疑応答、意見交換

閉会挨拶：松尾　知明（法政大学教職課程委員会幹事
キャリアデザイン学部教授）

司　　会：仲田　康一（法政大学キャリアデザイン学部准教授）

＜講　演＞

我が事ととらえるまなざしを育てる授業

政治に関心を寄せるきっかけとして

法政大学キャリアデザイン学部・社会学部兼任講師　本山　明

1　「時事問題を教室に」

教員養成の社会科の授業で考慮していることから入りたいと思います。私は開発教育協会（DEAR）というところに所属しており、長い間、理事をしています。1999年からヨーロッパのほうでGlobal Expressという教材が毎週毎週、発行されていました。

ニュース教材で、EUの教育局のほうで作成したわけです。主に南の国の問題を教材化して、それを読み合わせて交流しようということをEUのほうでやっており、その魅力でDEARに活動するようになりました。今では格差や平和の教材とか、SDGsの教材とか、そういうものをDEARの仲間と一緒につくっています。

大切にしていることは時事問題を教室にという点です。昭和の敗戦直後に時事問題が高校の選択教科になったわけです。社会科のさまざまな思考を働かせる上で、時事問題はとても大事かと思います。

私もテレビのいい番組をたくさんとっています。もう数千時間もとってありますが、それを学生に見せるのは本当に30分とかです。1年間28回ありますが、数時間です。しかし、えりすぐりの教材をとってあると思います。新聞も毎日毎日、いろいろな記事の切り抜きをしています。

2　共同的な学びができるように

学生が、共同的学びができるような授業形態をとることです。現在七、八十名の受講生がいますが、グループ席、4人席に座り、常に対話ができるようにしています。特に授業の中での意見や気持ち、価値観の交流を行うことが大事かと思います。ともすれば知識、知識で、詰め込み、暗記できた社会科の教育の中で、いかにして自分の感覚を外に出していくのかということが一つのポイントだと思います。

例えば、2013年にバングラデシュのダッカでラナ・プラザという縫製工場が崩壊し、1100名の労働者の人たちが亡くなっているわけです。こういうことを「どう感じますか」というように聞いても、学生はなかなか手を挙げて答えてくれないのですね。法政の学生は非常にスマートで、また優しく、私も、いつも来るとうれしくなってしまいますが、自分が外に出て発言することがなかなかできない、躊躇してしまう人が多いと思います。

そういうときに、「私の気持ち」というカードを使います。こういうカードで、こう書いてあります。ラナ・プラザの崩壊の場面を見せ、例えば悲しいとか、なぜこうなるのだとか、さまざまな自分の気持ちが書いてあるわけです。切ないとか、ひどいとか、意味が分からないとかですね。それを自分なりに丸を付け、その理由を書く。そうするとグループで、自分たちがそれぞれどう思ったか、感じたことを言い合うことができます。感じたことを言い合える。そういう事柄は知識・操作能力偏重の今の教育の中で欠けているような気がします。

テーマを共同的に見つける意味では、ブレーンストーミングなどもします。また学生が書いた意見、作成した文章を共有化し、そこに介入する、つまり他の学生が感想や意見を書き、それを授業支援システムにあげ、そこからこちらでいくつかを取り出し、それについてまた意見を書くようなこともします。学生同士の考えや意見を刺激的、つまり触発されるような授業をいかにつくっていくかがポイントだと思います。

3　中学校・高校の社会科の授業を再録すると手作り授業の制作

例えば歴史総合の授業で、私が民間の授業研究会に行き、そこで仕入れた1学期の授業を学生に見てもらう。またテーマを設定して授業をつくることが必要かと思います。私が重視しているのは、自分の関心のあるテーマを見付け、ゼロから授業をつくることがとても大事に思います。つまり枠組みです。文科省の枠組みとかそういうのを気にせず、自分でこのテーマで授業をつくってみよう。そういう体験をさせたいと思います。

私自身も夏休みに1年間に一つ、だいたい4時間から5時間ぐらいの授業をつくることを、中学校の教員としてきました。具体的には、回転ずしの授業、オリンピックの授業、水の授業、100円ショップの授業、プラスチックの授業、地球の食卓があげられます。

4　その分野で頑張っている人と出会うこと

人とのつながりから、その方の生き方とか覇気を感

じるような事柄を対面で語ってもらうことも必要に思います。なぜ、この人はこのことに人生を懸けているのかということです。その方の語りは、それは必ず学生の心の中に残っていくと思います。

5　服の一生の授業

2022年の実践を紹介すると、春学期は、「私たちの着ている服」というテーマで授業をつくりました。「調べてみよう　私の服」で、学生の家で調べてもらいました。使っていない服がどのぐらいあるかを数えてもらえました。これを死蔵衣服といいますが、学生の使っていない服はすごく少ないのですね。私なんか年を取っているせいもあり、たくさんありますが、よく聞いてみると学生は、僕らの年代よりも倹約をすごくしている。そういう感じがします。ある面では持続可能な生活をしているかと思います。びっくりしました。

服クイズ。30年間、日本の人口は微減ですが、供給される服の量はどれくらいですか。1.75倍になりました。その理由は何ですか。この答えは、大量の服がファストファッションとして出回っていて、安く大量に売ることにより、薄利多売でグローバル企業がたくさんもうけている状況があるわけです。ちなみに日本の長者番付の1位はユニクロを展開する柳井正氏で3兆2100億円の資産があります。

この写真を見てください。いろいろなところの廃棄された服がたくさん集まってきて、ハイチの山の中とかチリの砂漠とか、ガーナの砂漠とかに、20メートルぐらい積み上がっています。我々はあまりにも無謀な生産と消費をしている。それが地球に負荷をかけている。そういう状況があるわけです。

2030年に、CO_2の排出をいかにして下げるか。いまファッション業界は21億トンのCO_2を出しています。これはエネルギー産業に次いで多いのですね。これを何トンにしなければいけないかというと、11億トンに下げなければいけない。つまり半分です。1.5℃未満に到達するには、ファッション産業の浪費を半分にしなければいけないというわけです。これには産業構造の大きな転換が必要になるわけです。

服の一生です。こういうものも行いました。綿花畑のインドの労働者、児童労働等々です。これはACEというNGOの杉山綾香さんに来ていただき、講演をしていただきました。杉山さんはインドでさまざまな綿花労働の畑に行き、児童労働をなくす取り組みをしています。ACEという団体は専従者5人ぐらいでつくられたもので、私もこの団体に当初から関わっています。

そこでの話ですが、児童労働から解放された子どもたちが学校で、杉山さんと会ったときに、杉山さんはその子どもたちがすごく生き生きして、ニコニコしていたので、びっくりしたと話していました。つまり、本当につらい仕事から、さまざまな取り組みを通して、働かなくていいような状況になっていき学校にいけるようになったのです。

ピープルツリーというフェアトレードの企業の鈴木啓美さんにも来ていただきました。鈴木さんはバングラデシュに行き、現地の方とフェアトレード用の服をつくっています。バングラデシュの状況にも非常に詳しく、その中で、さまざまなちゃんとした人間らしい暮らしができるような状況での服の作成・生産をしています。

こういう搾取される労働者を支援するような政策を学生たちが構想することがまた必要だと思い、いろいろな機関に対し、どう働きかけるかをさまざま調べ、発表しました。例えば、実際いま行われているものでも、GAPであるとかスターバックス、LEVI'S等々、みんな児童労働をしていたのですが、国際的な動きの中で不買運動等があり、全てもう一度やり直すというか、児童労働なしに商品をつくるような形になっています。

消費者が商品を選ぶこと自体が非常な動きになっていくし、また銀行の中でも児童労働をやっているところの融資を止めるとか、そういうことも今の世界では可能になってくるわけです。われわれはそういう面ではさまざまな手段を持っていますが、それが明らかにされないことにより、「かわいそうだな」だけで終わっていることもたくさんあると思います。

そういう面で今日の演題のテーマですが、「我が事ととらえるまなざしを育てる～政治に関心を寄せるきっかけとして」と書いてあります。政治の話をきちんとしていくこともとても大事ですが、学生の今のサステナブルに優しく生きていくという、そういう一つのスタイルがあるわけです。そこに深く切り込んでいくような実践をつくりながら、そこの中で政治に対し興味を持ってもらい、政治に参加していくことがいま必要な気がします。

秋のテーマは「地球温暖化・異常気象」です。COP27が11月の初旬から開かれます。Fridays For Futureの方を呼び、そこに行ってきた報告をしてもらいます。そこで、これもまたバングラデシュに焦点を一つ合わせていて、Zoomでバングラデシュの環境NGOの方と結び、バングラデシュの異常気象、すごい豪雨というか、苦しんでいるわけですが、今の状況を法政のほうで話してもらおうと思います。つまり、自分の就職とかそういうところだけではなく、自分がどのように社会とか世界と関わって生きていくのかと

いうことを、学生と一緒に追求したいと思います。

6 「制限された枠内での対話的で深い学び」を取り払う

「制限された枠内での」と書いてありますが、私はそう思います。つまり、企業の利益をいかにして上げるかという、そういうことが裏に隠れてあるわけです。一般企業に入った学生に聞いてみると、いかにしたら売れるコンビニへの納品のお菓子をつくるか。そういうことで、グループでみんな研究するわけです。それで企画したお菓子を販売し給料をもらう。毎日疲れ切るほど働かないと食べていけないと話していました。なんで給料はこんなに低いのでしょう？　若い世代では20万円も手取り届かない額。それに比べて企業の内部留保や経営者の資産は年々積みあがっていきます。

実は学校の中での主体的で深い学びはもっと社会に対し批判的な思考力を付ける必要性があるのではないかと思います。特に、持続可能な社会の担い手を育てることが今回の指導要領に入りましたので、ここを一つの基軸として、どういうことをやったら持続的でないのかということを中心にしながら、やっていきたいと思います。

7　政治的リテラシーをつける

下にジェンダーギャップランキングがあります。(世界経済フォーラム2022年7月公表、内閣府男女共同参画局総務課）それを見てください。日本はどこにいるかというと116位にいます。そこの周りを見回すと、イスラム教の国がたくさんあります。それから、ヒンズー教のインドもあります。なぜ、日本は男子と女子のギャップがこんなに激しいのだろうか。

ルワンダは男女のギャップが少なく6位です。なぜかというと、戦争で民族対立により、男性が死んでしまっているわけです。亡くなってしまっているわけです。ルワンダの虐殺ですね。女性が立ち上がっていくしかなく、それでルワンダはギャップが少ないわけです。

学生に、「何でこんなに日本は低いの？　これは異常じゃない？　だって他の先進国と比べても異常に低いよね」と問いました。私は、これが原因ではないかと、そのとき話しました。

自民党が原理研究会、統一教会と一緒に政策協定を組んで選挙に行っているわけです。(2022年10月20日朝日新聞社、時事通信社）統一教会は男性中心にした純潔主義教義なので、政策協定でこういうところに応援してもらったら、自民党の持つ家父長制の男性中心の世界観（日本会議の世界観）と合わせ日本の政治体制はジェンダー差別を内部に含み込む闇の一つになっていると考えられると思います。

政治に関心を持ってもらい政治的なリテラシーを付けていくことをこれからもやっていきたいと思います。

8　教員として現場に出た卒業生と会う

私は法政大学多摩教職課程センターに勤めていました（2014~2018年)。そこでは教職をめざす学生の相談活動をしていました。それ以前は東京の下町の公立中学の教員をしていました。中学教員の生活はスリルに富んだもので子どもと向かいあう日々は何とも代えがたいものでした。

この間、送り出した教員になった卒業生と連絡をとり彼らの自宅そばまでいき会うことが出来ました。15名と連絡をとり12名（すべて本採用。高校6名、中学6名）と会えました。

感じたことは、公立中学校の現状はとても厳しいと感じました。2~3年目で休職に入った経験を持つ方が2名いました。原因は月80時間の残業と過密授業。中学教員の授業最大持ち時数は週24コマまたは22コマ。これを超えないと非常勤講師も取れません。週30コマありますので24コマと会議がはいれば1日5時間授業が続きます。同僚、管理職も疲れ傷つける関係になりがち。休職に入る直接のきっかけは、ひとりは保護者からのハラスメントに対し管理職が全く対処しない。もうひとりは主任教員からの激しい叱責。ふたりとも大変な経験を乗り越え、今は元気でいますが、そのうちのひとりはこう話していました。「新採が入ってきて相談にのりたいのだけれども、自分も疲弊し話すこともできない」。

もうひとつの課題は教科で採用されても特別支援学級の担任になることが多いことでしょう。その場合4教科ほどをもちますし教員は正規教員が少なく、新採2年目で特別支援学級の主任を任されている方もいました。その方は子ども同士の事故、トラブルが起こりそうで出勤から子どもの完全下校まですべてピッタリ子どものそばにいると話していました。

12名の方は「子どもと一緒にいることは楽しい」と言っていました。その表情を見て、素敵な人を教育現場に送り出したと感じています。

最後になりますが若い教員を送り出す私たちの大学も社会に対し危機的状況を訴え、改善を図る取り組みをしていくべきだと思います。

＜講　演＞

講義を通じて学生はどのように社会・世界と関わるか？

－「教育相談」における課題設定と共有－

法政大学キャリアデザイン学部教授　田澤　実

本稿は、2022 年 10 月 21 日におこなわれた法政大学教職課程センター 2022 年度シンポジウムにおける筆者の話題提供をもとに再構成したものである。

1.　はじめに

今回の新学習指導要領の改定では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力について「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の三つの柱が示されている。２０２２年度より高校では新学習指導要領が実施されており、地理歴史・公民は科目編成が大きく変わり、実社会とのつながりを意識した学習を重視する構成が目立っている。

たしかに､教育課程全体を通して育成を目指す資質･能力をどのように生徒たちに身に着けさせるか、どのように社会・世界と関わる機会を設けるのかについて議論することは重要である。しかし、そもそも教職課程を履修している大学生自身にとっての社会・世界はどのようなものなのだろうか。まずは学生自身が社会・世界のことを知ることの第一歩として、必要な情報にアクセスできるようになること（端的には新聞を読むこと）が必要なのではないか。教職課程のひとつひとつの授業の枠組でその機会を提供する事は可能なのではないか。本稿のきっかけはこのような問題意識であった。

本稿では筆者が担当した「教育相談」の講義において、教員自身が関連する新聞記事を紹介することよりも、学生自身が新聞記事を検索することを重視した取り組みを紹介する。

2.　教育相談の概要

ここでは筆者の「教育相談」のシラバスを紹介する。コアカリキュラムに対応しているという意味では汎用性のある構成ともいえる。

①授業の概要と目的

・学校における教育相談の意義と理論
・教育相談を進める際に必要な基礎的知識（カウンセリングに関する基礎的事柄等）
・教育相談の具体的な進め方やそのポイント、組織的な取組みや連携

②到達目標

教育相談を進めるにあたり、幼児、児童及び生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識を身につける。

③授業計画

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　幼児期、児童期の発達
第 3 回　青年期の発達
第 4 回　成人期の発達
第 5 回　カウンセリングの基礎
第 6 回　カウンセリングの技法
第 7 回　教育相談の進め方
第 8 回　非行に関する相談
第 9 回　いじめに関する相談
第 10 回　不登校に関する相談
第 11 回　虐待に関する相談
第 12 回　ひきこもりに関する相談
第 13 回　発達障害に関する相談
第 14 回　外部機関との連携

④テキスト（教科書）

渡部昌平（編著）柴田健・田澤実（共著）2018「実践 教育相談～個人と集団を伸ばす「最強のクラス作り」～」川島書店

⑤成績評価の方法と基準

平常点 30％、試験 70％にて評価

3.　学生はどのように社会･世界と関わるか？

①対象となる講義

対象となる講義は、2022年度春学期における筆者の「教育相談」であった。受講者は35人程度であった。そのうちの講義の後半で扱う以下の6回分について焦点を当てることにする。

「非行に関する相談」
「いじめに関する相談」
「不登校に関する相談」
「虐待に関する相談」
「ひきこもりに関する相談」
「発達障害に関する相談」

②講義の進め方

まず、講義の前半部分の進め方を述べる。いわば通常の進め方であった。最初に前回のまとめを振り返った。その後に、前回の授業で学生が記入したリアクションペーパーをいくつか紹介し、それらに対して筆者もごく簡単にコメントをした。感想の紹介にはパワーポイントを用いた。リアクションペーパーについて大学のコピー機でpdfに読み取り、そのうちから紹介する学生の感想について学生の氏名を削除してパワーポイントに画像を貼り付けた（詳細は田澤（2019）を参照）。このように、学生の感想を紹介することは、教員が感想をきちんと読んでいることを学生に伝えることでもある。これは教員と学生間の信頼関係を構築していく時期としても重要であったと思われる。また、講義の開始時に配布し、講義の終了時に回収しているため出席確認を厳格に行っていることを示す効果もあったと思われる。

次に、講義の後半部分の進め方である。「非行に関する相談」の回から感想の提出を手書きのリアクションペーパーからHoppii（注：法政大学の学習支援システム）に変更した。具体的には、授業で扱ったテーマについて新聞記事の検索をする課題を設けた。その際に、検索キーワードは筆者が指定した。新聞記事のツールとしてはGoogleニュース（https://news.google.com/）を主に利用することにした。具体例として「非行に関する相談」の回の課題を示す。

（1）グーグルニュースで「特定少年」で検索し、興味を持った記事名とURLを貼ってください。
Googleニュース
https://news.google.com/

（2）（1）で興味を持った箇所をコピーして貼り付けてください。

（3）今日の授業の感想を書いてください。
※すべて文字数自由

本来であれば、上記の（1）～（3）だけではなく、「新聞記事を読んだ感想」を独立して追加すべきである。しかし、毎回学生にそれを求めることは負担が大きいと判断して断念した。

各回で筆者が指定したキーワードを下記に示す。すなわち、学生は6回連続して関連する新聞記事を検索した。これらのキーワードを選出するにあたっては筆者が一度Googleニュースで検索をしてみて、そのキーワードで教育相談に関連するニュースをある程度見つけやすいことを確認した。

非行に関する相談⇒「特定少年」
いじめに関する相談⇒「いじめ　認知件数」または「いじめ防止対策推進法」
不登校に関する相談⇒「教育機会確保法」
虐待に関する相談⇒「児童虐待」
ひきこもりに関する相談⇒「ひきこもり」
発達障害に関する相談⇒「発達障害　学校」

新聞記事検索の課題を追加したことに伴い、授業の冒頭で学生の感想紹介も変更した。授業の冒頭で前回のまとめを振り返った後に、まず、学生が課題で取り上げた新聞記事で多かった記事名とURL（※課題（1）に該当）を紹介した。その後に、その新聞記事で学生が興味を持った箇所の切り抜き（※課題（2）に該当）を紹介した。最後に、通常の感想紹介（※課題（3）に該当）をした。

全体的な傾向として、課題（1）である「興味を持った記事名とURL」については、指定したキーワードで検索した場合、Googleニュースで比較的上位であり、新聞記事タイトルからも教育相談と関連がありそうだと想像ができるものが多かった。これは筆者の想定の範囲内の事であった。しかし、課題（2）である「興味を持った箇所をコピー」については、筆者にとっては意外なこともあった。複数の学生が同じ新聞記事を選択していても、課題（2）では異なる個所を選んでいることがたびたびあった。

③Googleニュースのメリットとデメリット

新聞記事検索をするために筆者が何故Googleニュースを指定したのか説明が必要であろう。当然のことながら大学には図書館のデータベースがある。たとえば、法政大学図書館では、朝日新聞（朝日新聞クロスサーチ）、日本経済新聞（日経テレコン21）、毎

日新聞（毎索）、読売新聞（ヨミダス歴史館）を閲覧できる。これらは学生が追加の料金を支払わずに利用ができる極めて有力なデータベースである。しかし欠点もある。これらのデータベースへの同時アクセス数は限られているため「同時接続数オーバー」が起こりうることである。そこで「同時接続数オーバー」がないGoogleニュースを指定することにした。

Googleニュースのメリットとデメリットについて下記に示す。デメリットもあるが、「同時接続数オーバー」がないことは最大のメリットであった。また、複数の新聞記事が掲載されていることもメリットであった。

Googleニュースのメリット
- 複数の新聞記事が掲載されていること
- スマートフォンからでもPCからでもアクセスしやすいこと
- 大学図書館データベースのように「同時接続数オーバー」がないこと

Googleニュースのデメリット
- 内容が薄い記事も掲載されていること
- 広告が多い新聞記事サイトもあること

4. まとめ

本稿では筆者が担当した「教育相談」の講義において、学生自身が新聞記事を検索することを重視した取り組みを紹介した。講義に関連する新聞記事は、教員なら「当然ここ」と思う箇所があるであろう。しかし、学生はそれ以外の箇所に興味を持つこともあるがわかった。このようなことは教員が普通に授業で先に紹介してしまうと見えないものである。

教育相談で扱うトピックには「非行」「いじめ」「不登校」「虐待」「ひきこもり」「発達障害」などがある。これらは新聞で取り上げられるテーマが多い。しかし、上記のトピックをそのまま検索キーワードとして検索するとヒット数が多すぎて教育相談の枠組からは外れてしまう記事も出てきてしまうことがある。

一般的に、学生が「関連する新聞記事を探せない」と主張する時には、検索をするためのデータベースを知らないことが理由の時もあれば、適切な検索キーワードが分からないことが理由の時がある。筆者が担当した「教育相談」は講義科目であるため、検索できないと主張する学生に事細かに対応することは難しくなることが予想された。そこで、上記二つの理由で検索ができないことはあらかじめ避けるような課題設定をした。

また、本稿の取り組みでは、学生が6回継続して新聞記事を検索し、課題を提出し、次の授業でそれを共有したことも大きな特徴である。これを繰り返すことは、講義終了後でも、社会関心事についてGoogleニュースで検索してみる習慣につながることも期待できる。

「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」について考える際にもこのような習慣は必要になるのではないだろうか。

参考文献

田澤実 2019「相互参加型の授業デザインと評価－ 100分授業、11段階評価を踏まえて－」（第Ⅲ部　法政大学教職課程センター 若い教師の集い・シンポジウム報告 第3回「法政大学若い教師の集い」開催報告 教職課程センター市ヶ谷シンポジウム『法政大学の教職課程を語る』）『法政大学教職課程年報』18 p107-110. https://www.hosei.ac.jp/application/files/1115/9219/1097/2019_13.pdf